

歴史小説事始



文芸誌「火の鳥」の締切りが迫っている。今年で三

年目、三作目ということになる。今まで情報産業に係わって来たので、書くものといえばコンピュータの命令ばかり。およそ文芸には縁がなかった。一作目は、私がコンピュータに係わるようになった経緯を。二作目は、叔父叔母が祖父母のことを書き留めておいてほしいということもあって、私の祖父母の思い出を書いた。いつれも時間がなくて書きなぐった感じで、読者にお勧め出来るようなしろものではない。今年はいっくりと夫の父が背負った長男としての重荷と、黙々とそれを果たした明治の男を書きたいと思っていた。

ところが、来年は、入来院氏が関東から地頭として下向してから満七百五十年になるという。入来院氏は、東郷、祁答院、鶴田、高城の諸氏とともに渋谷五族の

一族である。渋谷氏は承久の変の恩賞として薩摩に地頭職を得たのだった。七百五十年とは滅多にない歴史の節目である。私はこれら五族の子孫と記念のイベントを行いたいと思った。それにしても何も知らないのもお恥ずかしい。テーマを中世に絞って、勉強がてら歴史小説に取り組んでみようかと思いついたのが、今の難行苦行の始まりだった。

入来院氏の絶頂期は、十一代重朝公の時代で、その妹は十五代大守になられた貴久の妻であり、島津義久、義弘、歳久の母である。やはり的はここに絞ろうと思つた。先ず年代の特定が必要で、天皇・元号・西暦・島津の動向・入来院の動向を表にしてみた。資料は町の貧弱な図書館ではどうしようもない。県立図書館に行つてパソコンで検索して本を探すが、夏休みのこととて宿題用なのか、見たい本は貸出し中が多い。書庫の本を何冊か出してもらつて、あれこれ引つ繰り返してみるが、なかなか思つような資料に当たらない。一日目は島津関連の本のメモとどれが使えるそうか確かめるだけで終わってしまった。

図書館の階段を下りる途中で五代夏夫先生にお会い

した。先生には「火の鳥」の出版記念会でお会いしている。

「今年は歴史小説にしようと思つています」

自信はないが、自分を励まして後戻り出来ないように表明してしまつた。

入来からは鹿児島市内まで一時間弱はかかり、駐車料金も馬鹿にならない。出来るだけ入来町の図書館を利用して「川内市史」があつたのでそれも活用させて頂く。県立図書館も二回目からは、メモをとりながら必要な箇所を精読する。と今まで明らかになつていない部分が浮き上がつて来た。

鹿児島は島津の統治下にあつたから、歴史は島津側からしか見ていない。貴久の父忠良については、その母常磐夫人、その妻寛庭夫人については、いろいろな記述がある。しかし中興の祖である貴久の妻であり、島津家安泰に苦心し成功させた義久、義弘の母である雪窓夫人については一言の記述もない。隔年三人もの男子を生んでいるのであるから、貴久との中が悪かつた筈はないではないか。

忠良、貴久親子がまだ力弱かつた折、唯一のはつき

りした味方は入来院氏のみであつたこともわかつた。それが、貴久方が優勢となり、夫人の兄重朝も勢力が大きくなつて来ると、驕傲の振る舞いがあつたと一方的に排除するのである。重朝が渋谷氏一族や蒲生氏と共に貴久と岩剣城で対決する原因はそこにあつたのだ。

忠良、貴久の肖像画を見るかぎり、お世辞にもハンサムとは言えないが、義弘公の肖像画によると武者人形のように整つたお顔である。これは母が余程の美人であつたに相違ない。そして三人とも優秀であつたこともその母が素晴らしかつたからに決まつている。この際多少の身びいきがあつてもいいと思つている。

私の力では巧く表現できないかもしれないが、目下その辺のことを書いている。史実の羅列も困るが、事実の上のこと、それらを噛み合わせるのもなかなか難しい。幸い夏休みも終わつて、貸出し中だつた資料も戻つてきて、参考になる資料も二冊ほど借りて来た。見えない部分を推し量つて想像する楽しみを味わいながら、遅筆に鞭打っているこの頃である。

(平成9年9月)